

「第三章 通貨主義と一八四四年のイギリスの銀行立法」

「第三章」の抜粋

P704 エンゲルスの加筆部分

「……(青山略)このような減価、金にたいする紙幣の減価ではなく、金も紙幣もいっしょにしての減価、すなわち一国の流通手段の総量の減価は、リカードの大きな発見の一つであって、これをロード・オーヴァストーン一派がむりやりに自分たちの役に立たせ、一八四四年および一八四五年のサー・ロバート・ピールの銀行立法の基本原則にしたのである。」(マルクス『経済学批判』)

通貨主義者の商業恐慌の捉え方と銀行立法とその反証

P704-706 エンゲルスの加筆

「一九世紀の商業恐慌、ことに一八二五年および一八三六年の大恐慌……(青山略)これらの恐慌は、……(青山略)ブルジョア的生産過程のあらゆる要素の抗争がそこで激発する世界市場の大暴風雨だったのに、その根源も防止策もこの過程の最も表面的で最も抽象的な部面である貨幣流通の部面のなかで求められたのである。……(青山略)

商業恐慌の現象で最も一般的で最も目につきやすいものは、商品価格がかなり長く一般的に上がっていたあとで突然それが一般的に下がるということである。……商品価格の周期的な一般的下落はなにから起きるのか？貨幣の相対的価値の周期的な上昇からである。……同義反復の因果関係への転化が一度認められてしまえば、ほかのことはなんでも簡単にわかってしまう。商品価格の上昇は貨幣の価値の低下から起きるが、貨幣価値の低下は、われわれがリカードから聞くところでは、十分すぎる流通から起きる。すなわち、流通する貨幣の量が、貨幣自身の内在的価値と諸商品の内在的価値とによって規定されている水準を超えて増大する、ということから起きる(ということに、「同義反復の因果関係への転化」によってなる——青山)。……(青山略)ところで、このような、リカードの言う金属流通そのものの性質から生ずる一般的な価格変動にもかかわらず、その激烈な強暴な形態、その恐慌形態は、信用制度が発達している時代に属するのだから、銀行券の発行は正確に金属流通の諸法則に従って調節されるのではないということ、まったく明らかになるのである。」(マルクス『経済学批判』)

そして、エンゲルスは、この派(通貨主義者)を批判するトマス・トゥックらの銀行主義論者たちも「貨幣と資本との関係がどんなにわかっていなかったか」については、再三、「第三部の第二十八章で見てきたところである」ことを述べています。

P709

「商品の需要供給はその商品の市場価格を調整する……(青山略)商品価格は通貨量の変動によって調節されるという主張が、今度は、割引率の変動は貨幣資本から区別された現実の素材的資本にたいする需要の変動を表すという文句の下に隠されてしまうのである。」

P712

「オーヴァストーンによれば、国内に貨幣が多すぎたので商品が高すぎたのである。」

P713 エンゲルスの加筆部分

「長い後陣痛を伴った一八三七年の恐慌、それにつながる一八四二年のもう一つの完全な後続恐慌、そして、過剰生産には目もくれようとしなかった産業家や商人の利己的盲目一

一じっさい過剰生産などというものは俗流経済学によればばかげたことであり不可能事だったのだ！——、これらのものがついに人々の頭の中にあのような混乱をひき起こし、この混乱が通貨学派にその独断説を国民的規模で実行に移すことを許したのである。一八四四/四五年の銀行立法は通過したのである。」

P714

「これによって、厳密に金属流通の諸法則に従うオーヴァストーンの理想的紙券流通が実行され、それによって、通貨主義派の主張によれば、恐慌は永久に不可能にされたのである。……(青山略)こうして、流通手段の量は、まさにそれが最も多く最も切実に必要になる瞬間に縮小されるのである。こうして、一八四四年の銀行法は、直接に全商業界をそのかして、恐慌が起こりそうになるといち早く銀行券の予備を貯えさせ、したがって恐慌を速くさせ激しくさせるのである。」

P720

「次のような規定はすべて利子率の引き上げに帰着する。すなわち、イングランド銀行は金準備なしでは一四〇〇万を越える銀行券を発行してはならないという規定、銀行部は普通の銀行として管理されるべきで貨幣過剰期には利子率を引き下げ逼迫期には引き上げるべきだという規定、……(青山略)という規定がそれである。」

P723

「第四四九六号。『旺盛な輸出について言えば、……国内の取引が沈滞していれば、これは必然的に旺盛な輸出を呼び起こす。』」

P724

「イングランド銀行券の信用はすべての専門家によって不動なものと認められている。それにもかかわらず、銀行法は九〇〇万～一〇〇〇万の金をイングランド銀行券の兌換可能性のために絶対的に固定させるのである。」

P725

「第五五〇八号。『では、だいたいにおいてあなたの意見では、現在の制度』(銀行立法の)『は、産業の利潤を周期的に高利貸の財布に入れるにはまったく巧妙な制度だというわけか？——それが私の意見である。』」

P726-727 エンゲルスの加筆部分

「そして、この銀行法の父、銀行業者サミュエル・ジョーンズ・ロイド、またの名をロード・オーヴァストーンは、これらのすべてにたいしてなんと言うだろうか？

すでに一八四八年に彼は商業者苦境に関する上院委員会で、

『十分な資本がないために起きる貨幣逼迫や高い利子率は、銀行券の発行をふやすことによって緩和することはできない』(第一五一四号)

ということを繰り返し述べている。とはいえ、一八四七年一〇月二五日の政府書簡(銀行法の停止——青山)によって銀行券発行の増額が**許可された**だけでも恐慌のほこ先を折るのには十分だったのに。

彼は、

『高い利子率や製造工業の不況は、産業や商業の目的に充用できる**物的**資本の減少の必然的な結果だった』(第一六〇四号)

ということを固執している。

ところが、数か月来の製造工業の不況は、物的商品資本が倉庫にあふれているのにそれがまったく売れなかったということ、また、それだからこそ、売れもしない商品資本をこれ以上生産しないようにするために、物的生産資本が全部かまたは半分も遊休していたということにあったのである。」

「第三四章」のポイントと現代の私たちが留意すべき点

エンゲルスは第三部の「序文」で、『『混乱』からあとの、そしてすでにそれ以前の箇所を取り入れられなかったかぎりでの、すべてのこれらの材料から、私は第三三～三五章をまとめ上げた』と述べていますが、第三四章は「エンゲルスの加筆部分」がたいへん多い章ですが、エンゲルスの加筆によって一つのまとまった「章」に仕上げられています。「第五篇」のエンゲルスの編集について「辛口、過ぎる大谷氏も、「第三四章」の編集については、「ただただ見事」と「評価」するほどです。

恐慌を激化させるイギリスの銀行立法

一九世紀の商業恐慌、ことに一八二五年および一八三六年の大恐慌は、ブルジョア的生産過程のあらゆる要素の抗争がそこで激発する世界市場の大暴風雨だったのに、その根源も防止策もこの過程の最も表面的で最も抽象的な部面である貨幣流通の部面のなかで求められた。しかし、その激烈な強暴な形態、その恐慌形態は、信用制度が発達している時代に属するのだから、銀行券の発行は正確に金属流通の諸法則に従って調節されるのではなく、したがって、貨幣の流通が恐慌の根源でないことは明らかである。

しかし、過剰生産には目もくれようとしない産業家や商人の利己的盲目と過剰生産などというものは俗流経済学によればばかげたことであり不可能事であるという観念が人々の頭の中に混乱をひき起こし、この混乱が、オーヴァストーンを先頭とする通貨学派の、国内に貨幣が多すぎたので商品が高すぎたのであり、高い利子率や製造工業の不況は産業や商業の目的に充用できる物的資本の減少の必然的な結果であり、十分な資本がないために起きる貨幣逼迫や高い利子率は、銀行券の発行をふやすことによって緩和することはできない、厳密に金属流通の諸法則に従う理想的紙券流通が実行されれば恐慌は永久に不可能にされるという主張、その独断説を国民的規模で実行に移すことを許したのである。一八四四/四五年の銀行立法はこうして通過したのである。

こうして、流通手段の量は、まさにそれが最も多く最も切実に必要になる瞬間に縮小されるのである。一八四四年の銀行法は、直接に全商業界をそそのかして、恐慌が起こりそうになるといち早く銀行券の予備を貯えさせ、したがって恐慌を速くさせ激しくさせるのである。

しかし、恐慌の原因は、産業や商業の目的に充用できる物的資本の減少の必然的な結果でも、国内に貨幣が多すぎたので商品が高すぎたのでもなく、物的商品資本が倉庫にあふれているのにそれがまったく売れなかったということ、また、それだからこそ、売れもしない商品資本をこれ以上生産しないようにするために、物的生産資本が全部かまたは半分も遊休していたということ、そして何よりも、当面支払うべき貨幣が無いために信用の連鎖が破壊されたことにある。

だから、一八四七年一〇月二五日の政府書簡(銀行法の停止——青山)によって銀行券発行の増額が**許可された**だけでも恐慌のほこ先を折るのには十分だった。

銀行立法で誰がもうけたか

銀行立法による「イングランド銀行は金準備なしでは一四〇〇万を越える銀行券を発行してはならないという規定、銀行部は普通の銀行として管理されるべきで貨幣過剰期には利子率を引き下げ逼迫期には引き上げるべきだという規定」、イングランド銀行券の信用はすべての専門家によって不動なものとして認められているのに、「それにもかかわらず、銀行法は九〇〇万～一〇〇〇万の金をイングランド銀行券の兌換可能性のために絶対的に固定させる」ということ、これらの規定は、「すべて利子率の引き上げに帰着する。」だから、銀行立法の現在の制度は、「産業の利潤を周期的に高利貸の財布に入れるにはまったく巧妙な制度だというわけ」である。

マルクス・エンゲルスは「通貨主義派」でも銀行主義論者でもない

エンゲルスは、この派(通貨主義者)を批判するトマス・トゥックらの銀行主義論者たちも「貨幣と資本との関係がどんなにわかっていなかったか」については、再三、「第三部の第二八章で見てきたところである」ことを述べています。

現代の私たちが留意すべき点

「第三四章」は、「恐慌」と「貨幣」に対する誤った見方とそれに伴う誤った「銀行立法」、そしてその結果として誰が利益を上げるかが述べられています。

いまの日本は、「貨幣」が不足していないのに、日銀が、国債を買うだけでなく株まで買って、市場にジャブジャブ資金を供給し、株高・資産高を起こそうと躍起になっていますが、成功する見込みはまったくありません。そこまで、日本経済は疲弊してしまっています。

「第四四九六号。『旺盛な輸出について言えば、……国内の取引が沈滞していれば、これは必然的に旺盛な輸出を呼び起こす。』」(P723)という文章がありますが、私たちは小学生、中学生の頃から、「日本は資源がないから、輸出立国で生きる以外に道はない」と教え込まれてきました。この教育効果は絶大です。輸出中心の一本足打法の哲学が国民の意識に染みついています。だから、黒字がどんなに大きくなっても「輸出」を拡大し続けてきました。そのことをマルクスは皮肉まじりに「節度ある勤勉な国民は、奢侈にふける富裕な国民の需要を満たすためにその活動力を使用する。……貧しい国とは、その人民が安楽に暮らしている国のことであり、富裕な国とは、その人民が通例貧しい国のことである。」(マルクス『剰余価値学説史』I)と言いました。そして、「輸出」だけでは物足りず、一層の利潤の拡大を求めて国内の生産を縮小して海外での生産を拡大し、国内の「産業の空洞化」を危険水域まで推し進めてしまいました。その結果、市場にジャブジャブ資金を供給しても、疲弊しきった日本経済は資本主義的生産様式における「正常な」「産業循環」すら実現することができません。「国内の取引」は「沈滞」し続けたままです。

私たちは、「市場にジャブジャブ資金を供給」する当面の政策を批判するだけでなく、そのような政策をせざるを得なくなった日本の経済・社会の姿を正しく国民に伝え、その変革の道を明確に示す必要があります。

「第三四章」を読む時も、必ず、いまの日本を、一時も、忘れないで下さい。